

学び講座Q & A

ペリー艦隊の「蒸気船」と煎茶の「上喜撰」

—藤間柳庵「米里幹百人一首」ほかを参考に—

平山 孝通※

ある市民学び講座で幕末の歴史に興味がある方から、次の様な質問がありました。

「幕末の世相を現す有名な狂歌の一つである「泰平のねむりをさますじようきせん(蒸気船・上喜撰) たった四はいで夜も寝られず」は、ペリー艦隊の蒸気船と煎茶の上喜撰とを掛けた狂歌とは聞いていますが、誰が、いつ、作ったのか、よくわからないのですが。」という内容です。

(1) 筆者は茅ヶ崎市域の幕末維新期を考える際に、当時の茅ヶ崎・浦賀・小田原付近の世相の緊迫感を伝える資料として、柳島村の名主・藤間善五郎(柳庵)が書き残した「太平年表録」の一節と狂歌「米里幹百人一首」を使って説明しています。その際、この有名な狂歌を紹介することがありますが改めて出典はと問われると、「どんなもんじやろう」と考え込んでしまいます。

誰が、いつ、どのような状況の中で創ったのでしょうか。手元の文献を引用してヒントを探りたいと思います。

はじめに各引用文献の「概要」を示します。次に、「狂歌の掲載部分」を抽出して比較の資料としてみましょう。

①まず、『武江年表』です。これは江戸に起こった事象を編年体で記した江戸研究の基本的書物で、江戸の町名主・齋藤月岑(げっしん)が著しました。正統12巻で、ペリー来航の嘉永6年(1853)の項は明治12年(1878)に成立した

続編に含まれています。

大正元年(1912)発行の「増訂版」で確認しましょう。

6月3日、北亜墨利加合衆国華盛頓使節正使マツテウセロベルリの船大小4艘、相州浦賀の要津に舶し貿易を乞ふ、……………同月9日浦賀の鎮台戸田・井戸の両侯、同州久里浜にして其呈書を受納ありしかば、同12日……………沿海を発せり、江府の貴賤始には子細を弁ぜずし恐怖して寢食を安んぜず、老人婦幼をして郊外遠陬に退しめしもありしが、平穩にして不為に属し、諸人安堵の思ひをなせり、……………

泰平のねむりをさますじようきせん(蒸気船・上喜撰) たった四はいで夜も寝られず、又或卿の御戯のよしにて、日のもとやまだちやるめる※もふかぬまにとけて帰りしあめ(飴)りかのふね

※ちやるめる…ペルシャの軍楽隊が使用した楽器

(「巻之九 嘉永六年 癸丑」『増訂武江年表』国書刊行会)

②次の資料は、戦時中に横須賀海兵団が発行した『(写真帳)』で、久里浜ペリー上陸記念碑前での集合写真に次の狂歌が添えられています。

太平の眠りをさます上喜撰(蒸気船) たった四杯(四隻)で夜も眠れず

(横須賀海兵団機関科新兵記念写真帳編輯委員編1938『昭和13年6月入団、四等機関兵修業記念(写真帳)』横須賀海兵団)

③次は、1960年代に刊行された中央公論社の通史の1冊に次のような記述があります。

「よく知られている風刺は次の狂歌である。」「正喜撰というのは上質の茶の銘柄で、これをのむと興奮してよく眠れない。もちろん蒸気船にかけているわけである。」「風刺の狂歌」、「茶の銘柄」と記されています。ふつう、よく知られている風刺は次の狂歌である。

泰平のねむりをさます正(上)喜撰 たった四はいで夜もねられず

正喜撰というのは上質の茶の銘柄で、これをのむと興奮してよく眠れない。もちろん蒸気船にかけているわけである。

まことにペリー艦隊の来航は、治国を乱国としたともいえる。ただ4隻のアメリカ軍艦の来航が、日本を大きくゆさぶった。幕末の動乱は、本格的にここからはじまった。

(小西四郎¹⁹⁶⁶「黒船出現」『日本の歴史19 開国と攘夷』中央公論社)

④次は、『教育社歴史新書〈日本史〉』の1冊です。黒船来航から明治維新へと激動する時代を生きぬいた江戸庶民の目がとらえた幕末維新史です。多くの落書が引用されていますので大変参考になる本です。

ペリー来航にともなう幕府の狼狽と市中の混乱をよんだ落首と落書はおびただしくつくられた。(中略)

泰平の眠りをさます上喜撰 たった四はいで夜も寝られず

蒸気船とお茶の上喜撰、4杯と4隻とをかけたものである。

(南和男¹⁹⁸⁰「黒船騒ぎ、さまざまな落首と落書」

『教育社歴史新書〈日本史〉104 維新前夜の江戸庶民』教育社)

⑤次は、『岩波新書』(新赤版)の1冊です。ペリーの率いる黒船が日本に与えた影響は何か。「異変」の概念を用いて、日本の近代の開始と幕末社会の変容を考察した書物です。「茶化した、からかった」という表現には同感です。

語呂合わせや掛け言葉を自在に使って風刺をきかせた歌をひねり出すやら、絵と文字の多色刷の瓦版を出すやらで沸き立つ。その速さも量もひと通りではない。

泰平の眠りをさます上喜撰(蒸気船) たった四はいで夜も眠れず

上喜撰は当時の茶の銘柄。蒸気船で上を下への大騒ぎを、カフェインの効いた茶のために眠れないことに掛けている。「夜も眠れず」を恐怖とか脅威を歌ったものと解釈するのは、一方的にすぎるであろう。上茶の振る舞いがあったという感じさえする。次の変形を見よう。

井戸の水あつてよく出る蒸気船茶の挨拶で帰るアメリカ

井戸の水が茶によく合い、茶飲み程度の挨拶だけでアメリカは帰ったという。「井戸」とは浦賀奉行の井戸弘道のことをさす。また「茶にする」

は「馬鹿にする」の意であることから、ペリーが「ちよつとからかった」というニアンスも込められている。帰ってしまったえば対岸の火事で、さっそくこちらの騒ぎぶりを茶化している。

(加藤祐三¹⁹⁸⁸「黒船来たる、揺らぐ鎖国政策」
『黒船異変―ペリーの挑戦―』岩波書店)

⑥次は、直木賞作家・司馬遼太郎の作品です。『竜馬がゆく』は菊池寛賞を受賞(昭和41年)した代表作の一つです。文庫本を参照します。

「当時こういう落書が、何人の手によるものか、江戸の市中にはりだされた。」とあります。小説の一節ですが、詠み人知らずの狂歌、これが真実に近い描写かもしれません。

泰平のねむりをさますじょうきせん たった四はいで夜もねられず

当時こういう落書が、何人の手によるものか、江戸の市中にはりだされた。上喜撰というのは上質の銘茶で、これを蒸気船にかけ、たった4はいのんだだけで上も下も、夜もねむれずに興奮していることを皮肉った。

(司馬遼太郎¹⁹⁹⁸「黒船来」『竜馬がゆく(1)』文芸春秋。
単行本の「あとがき」は昭和38年執筆)

⑦次は、「喜撰とは、茶の銘。上喜撰は上級茶葉の代名詞。平安時代の歌人・喜撰に由来するのである。」と、茶に関する記述と「百人一首」の歌人喜撰法師との関わりがみえます。

泰平の眠りを破る上喜撰 たった四はいで夜も寝られず

喜撰とは、茶の銘。上喜撰は上級茶葉の代名詞。平安時代の歌人・喜撰に由来するのである。喜撰法師には、茶処・宇治に住み、仙人になったという伝説がある。嘉永6年(1853)、ペリーが率いる4隻の黒船に遭遇した人々は、上喜撰と蒸気船をかけて、安らかな眠りが妨げられることを憂えた。異国の脅威を理解していたのである。

(河合真如²⁰¹⁰「黒船来航」『講談社文芸ヴィジュアル、
絵で見る美しい日本の歴史』講談社)

⑧最近刊行された資料も参考にしてみよう。

平成25年に開催され茅ヶ崎市美術館開館15年・藤間柳庵没後130年記念企画展、の図録の「こあいさつ」の冒頭に記されています。「大騒動を引き起こしたことを笑う作者不詳の狂歌です。」とあります。

この、「こあいさつ」は柳庵の事蹟を簡潔に紹介しています。

太平の眠りを覚ます上喜撰 たった四杯で夜も眠れず

浦賀沖に現れたたった4艘の異国船が国をあげての大騒動を引き起こしたことを笑う作者不詳の狂歌です。上喜撰とは眠気をはらう煎茶の銘柄、蒸気船にかけた洒落でしょう。

嘉永6年6月7日、茅ヶ崎柳島村名主、数え53歳の藤間善五郎(柳庵)は黒船来航の噂を聞き現地にかけつけました。廻船業を生業とする柳庵にとって海上の変は他人事でなかったのでしょうか、……小高い浦賀の丘に上り、遠眼鏡をとおして眼下に黒々と煙を吐き疾走する黒船の偉容を目撃したことを冷静な筆致で名著『太平年表録』の冒頭に書きとめています。その日、初めて目にした異様で力強いものの印象から柳庵は直感的に日本の行く末、運命を正しく予感したのではなかったでしょうか。

(茅ヶ崎市美術館2013「こあいさつ」『藤間家所蔵文人名主由縁浮世絵』)

⑨最後は、全15巻のシリーズで読み応えのある学習漫画です。三コマの町人の会話形式で分かりやすく世相を説明しています。

町人A「泰平のねむりを覚ます上喜撰 たった四杯で夜もねむれず」か

町人B「何だいそりゃあ」

町人A「知らないのか、今はやりの狂歌(皮肉・滑稽・風刺などをよみこんだもの)だよ、宇治(現・宇治市)の高級なお茶「上喜撰」と黒船の「蒸気船」をかけているのさ、お茶を飲んだらねむれないのと同じで黒船が4隻来ただけでねむれないほど大あわてつてよんでいるのさ」

町人B「なるほどそいつはうめえ」

(山本博文監修2015「黒船がやってきた!」『角川まんが学習シリーズ

日本の歴史11 黒船と開国 江戸時代後期』角川書店)

以上、9点の書籍を読み比べてみました。これで狂歌の概要はつかめたかと思えます。少しずつ違いがみられますが、『武江年表』や『竜馬がゆく』に掲載されている

泰平のねむりをさますじょうきせん たった四はいで夜も寝られず

が詠み人知らずで江戸市中に張り出され、庶民が写し、その後の転写で変化して今日に伝わったものでしょう。最初の表現を探すのは難しいかもしれません。

(Ⅱ) 次はお茶です。

お茶の「上喜撰」は「百人一首」の8番目の「喜撰法師」の歌に由来しているようです。

「わが庵は都のたつみ(辰巳)し(然)かぞむ世をうじ山と人は言ふなり」(解釈:私の庵は都の東南にあつて、このように心安らかに住んでいる。それなのに、世の人は世を憂いてうじ山に住んでいると言っているそうだ)です。

さて、「百人一首」は、百人の歌人の歌を一首ずつ集めたもので、藤原定家が京の小倉山山荘で撰したと伝えられる「小倉百人一首」が大変有名です。江戸時代には「歌がるた」にも用いられました。しかも、手習所のテキストの一つとして、江戸の庶民の教養としても百人一首は浸透していたのでしよう。茅ヶ崎市内でも旧家の蔵書の中に見ることがあります。

江戸庶民の生態を知る川柳集である『誹風柳多留』(九編)に喜撰法師の歌を元歌にした「茶ののめる庵は都の辰巳也」というのがあります。百人一首という共通の下地があつてこそ、「じょうきせん たった四はい……」の歌がおもしろいと理解ができるのでしよう。

平成のいま「喜撰法師」の歌から宇治の煎茶の一つである「喜撰」「上喜撰」「正喜撰」を連想できる人がどれほどいるのでしょうか。

喜撰の歴史をたどりましょう。

蒸気船に掛けた、上喜撰や正喜撰は、山間の村である山城国宇治郡池尾村(現・宇治市池尾)で生産された煎茶を指し、最初の銘は「上」や「正」

が付かない「喜撰」でした。寛政元年(1789)頃には煎茶製造農家が急増していますが、寛政6年刊行のある書物に「喜撰は山岳の名、其の山下なる池の尾に出すなり」とあるように、池尾村の「喜撰」は有名になっていました。そのために「喜撰」の偽物が出るようになり、それと区別するために「上喜撰」や「正喜撰」という銘を使うことになったようです(橋本素子2016『日本茶の歴史』)。

ペリー来航の60年ほど前には、煎茶・喜撰は偽物が出るほど有名な銘柄となっていたようです。庶民の憧れの上等な銘柄だったのでしょう。

(Ⅲ) 近年、京都の茶所である宇治を訪ねる機会がありました。

奈良線の宇治駅前の観光案内所で、「喜撰」か「上喜撰」を商う宇治茶の老舗を伺いましたが、不案内でした。いまでは有名な煎茶ではないのでしょうか。

「観光マップ」を頼りに紹介された「宇治・上林^{かんばやし}記念館」と「宇治茶資料室」を訪ねました。

宇治・上林記念館の案内書には、「上林家は丹波上林郷(現・京都府綾部市)の土豪で、永禄年間に宇治に移住し、茶業に携わった。豊臣秀吉に重用され、茶頭取として宇治茶の総支配を命じられた。徳川家光の時代には将軍家御用の茶の調達を宇治茶師に当たらせ、茶壺の往還は「茶壺道中」をもって行われた」とありました。

「茶壺道中」からある童謡を思い出しました。

「ズイズズツコロバシ、ゴマ味噌ズイ、茶壺に追われて、トッピンシヤン……」です。

江戸の将軍家御用の茶壺道中を唄ったものです。トッピンシヤンとは、街道沿いに住む子ども達は威張り散らす茶壺道中に関わりたくないの、家に飛んで帰り息をひそめる様子を現したものだそうです。戸を力を込めてピシヤン(戸をぴしゃん)と閉めた音だそうです。江戸の庶民にとって茶は宇治、茶壺道中は迷惑だ、関わりたくない、という思いを強くしたことでしょう。

それらを受けて、ペリー艦隊の蒸気船を目の当たりにして慌てふためく

武士の様子と、混乱する世相を茶化す、ここぞと許りの格好の材料だったのかもしれませんが。「茶壺道中」に日ごろ追われ迷惑する子ども達からの茶化しが少しは加味されていると考えれば、より深い味わいを感じられます。

宇治・上林記念館の資料を閲覧させていただきました。

「喜撰」と「正(上)喜撰」に関する資料は近代のものですが、2点ありました。

1点目の資料の表題は「御茶銘并価之記」で、発行は「菟道 御茶司上林春松精製」とあります。

「御煎茗」の項目に10銘柄があり、1斤(2百目)の価格が記されています。10銘柄のうち値段順に「正喜撰」は3位、「喜撰」は6位です(しかし、価格の記載欄は黒く消されていますので、この時点で喜撰の販売は中止されていたかもしれません)。喜撰法師の百人一首の歌に因むものとしては「我ヶ庵」が2位に、生産地に因む「池ノ尾」が1位です。

売店で、「煎茶・喜撰」が販売されていましたので、品質のランクを伺いました。中の上ぐらいだそうです。

資料をみてみましょう。

御煎茗	1斤	
池ノ尾	価	1円25銭
我ヶ庵	同	1円
正喜撰	同	
万代	同	75銭
花橘	同	
喜撰		(欠)
山吹		(欠)
雁金	同	50銭
桐生粉	同	25銭
飛出し	同	18銭10厘5毛



平成の「喜撰」の袋
(ちがさき丸ごと博物館
坂井源一氏撮影)

2点目の資料の表題は「御茶銘録」で、発行は「菟道 製造人上林春松」です。

「印刷京都日報社」とありますので、発行年代などのヒントが得られるかもしれません。値段を比較してこちらの資料が新しいと思われます。

「御煎茶」の項目に7銘柄があり、1斤の価格が記されています。7銘柄のうち「正喜撰」は3位ですが「喜撰」はありません。「池の尾」が1位、「我が庵」が2位でかわりはありません。

御煎茶	1斤目方2百目
池の尾	価 1円40銭
我が庵	同 1円10銭
正喜撰	同 1円
万代	同 85銭
雁かね	同 65銭
相生粉	同 35銭
飛出し	同 25銭

次に、宇治茶資料室を訪ねました。関連資料は1点ありました。

表題は「改正茶銘価額表」で、発行は「山城国宇治町三星園上林茶店(電話東京・大阪)」です。「煎茶製」の項目に10銘柄があり、「正喜撰」は7位、「喜撰」は8位、「池ノ尾」は3位です。

煎茶製(百目二付)

鳳凰殿	金 2円
山路	金 1円50銭
池ノ尾	金 1円20銭
松濤	金 1円
花橘	金 90銭
霜ノ花	金 80銭
正喜撰	金 70銭
喜撰	金 60銭
朝日	金 50銭
一森	金 40銭

以上、わずか3点の資料の検討では結論は出ませんが、よく言われる正喜撰は上等な茶というのは、必ずしも正しい表現とはいえないかもしれません。また、茶の名称としては「上」でなく「正」でしょうか。ともあれ、世相を皮肉る「泰平の…」は狂歌としては最高傑作のひとつといえるでしょう。

ついでに、宇治市内の喜撰法師に関わる名所を地図で訪ねてみましょう。

宇治川の中州・塔の島に架かる橋が「喜撰橋」、橋の付近で土産屋と食堂を兼ねる「喜撰茶屋」、その上流には「喜撰山大橋」、「喜撰山ダム」、「喜撰山発電所」とみえます。喜撰が庵を結んだ宇治山を喜撰山とも言うようですが、三室戸の奥と言うだけで、どの山を指すのかはわからないそうです。宇治川のほとりにある抹茶京料理の「辰巳屋」も喜撰の歌に関わる屋号を掲げています。

いつの日か、嘉永6年の黒船を想像しつつ、宇治川を眺める茶屋で「煎茶・喜撰」をゆつくりと吸りたいものです。

(Ⅳ)もう少し幕末の世相を、柳島の藤間柳庵の狂歌などを参考にみてみましょう。

名主善五郎、文人柳庵の人となりは『茅ヶ崎市史ブックレット17 藤間柳庵』や『藤間家所蔵文人名主由縁浮世絵』などを参考にしてご検討ください。

「百人一首」と小出・芹沢の旧家所蔵「狂歌、神国吉左右三十六歌仙初編」、柳庵「米里幹百人一首」(『雨窓雑書』三編、『茅ヶ崎市史史料集』7(1)に収録)の3点を比較してみましよう。日本史に繋がる茅ヶ崎の歴史が感じられると思います。

比較する歌人は、筆者の好みで7人を取り上げました。

「米里幹百人一首」の詳細については藤城憲児氏の『茅ヶ崎市史史料集』7(2)の解説(187〜8頁)をご参照ください。

まずは、煎茶・喜撰の名前の由来となったといわれる、

①喜撰法師の歌をみてみましょう。

「わが庵は都のたつみしかぞ住む世をうじ山と人はいふなり」ですが、それを受けた「狂歌、神国吉左右三十六歌仙初編」では、

「わが家は浦賀の近所よしとも浜危ないこと人はいふなり」となります。柳庵では、

「あめりかは日本の丑かとのかた世の果国と人はいふなり」(ペリー艦隊来航の嘉永6年は丑年、翌7年は寅年です。あめりかは丑と寅の年に鬼門である丑寅の方角(北東)から来ました。江戸市中で出された瓦版のペリーの画は鬼の形相を持つものも多く、それを目にした柳庵はペリーを鬼と見立てたのでしょうか。)と詠んでいます。

以下は「歌人名」、「百人一首」、「狂歌、神国吉左右三十六歌仙初編」、柳庵「米里幹百人一首」の順に記しています。なお、歌は現代の表記にしました。「百人一首」は『新潮古典文学アルバム11 百人一首』を参考にしました。

思わず苦笑してしまうような作品がならんでいます。ほかの作品も機会をみて比較してみましよう。

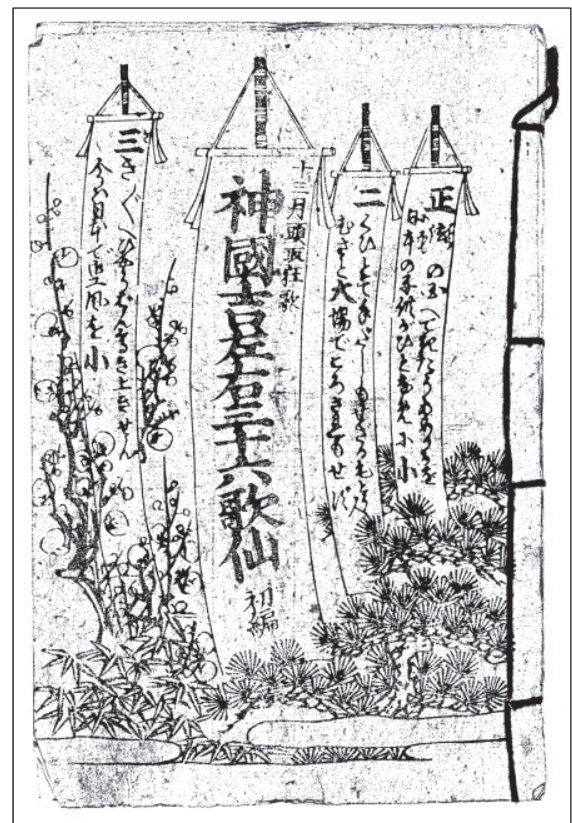


図1 『狂歌、神国吉左右三十六歌仙初編』の表紙



図2 喜撰法師ほかの狂歌

② 山部 赤人

百人一首	田子の浦にうち出でて見れば白妙の富士の高嶺に雪は降りつつ
狂歌	町なかへうち出で見れば道具屋のよろいかぶとの高値売れつつ (慌てて武具を買い揃える武士、その足元をみる商人、その様子を茶化す江戸っ子。)
米里幹 百人一首	武山に登りて見ればしろ妙の帆かず重て走るあめりか (柳庵は、武山(標高約二百 ^{メートル})から白い帆を掲げて走る蒸気船を眺めた。)

③ 猿丸太夫

百人一首	奥山に紅葉踏み分け鳴く鹿の声聞く時ぞ秋は悲しき
狂歌	奥様も旦那はお勤め留守をして一人寂しく寝るぞ悲しき (勤番で家を空ける武家の奥方の寂しき、悲哀を楽しみつつ、皮肉る江戸っ子。)
米里幹 百人一首	春夏のうみ乗わけてあめりかの船来る時ぞ秋はまたなん (春1月、夏6月と海を渡ってアメリカの船が2回来た、秋にも又来るのか。)

④ 阿倍仲麿

百人一首	天の原ふりさけ見れば春日なる三笠の山に出でし月かも
狂歌	高輪でふりさけ見ればはるかなる品川沖へ出来し島かも (幕府は急ぎ台である台場を造り江戸湾の防備を固めたが後手、後手。台場は役に立たなかった。)
米里幹 百人一首	うみの原遠眼に見ればたれ人も島かと思うあめりかのふね (柳庵53歳、西浦賀の高丘から遠鏡で藤沢の友と黒船を眺める。佐久間象山43歳、その弟子吉田松陰24歳からも江戸から急ぎ浦賀に向かい平根山(久里浜の北角)から同じように黒船を眺める動乱の幕末の一こま。ペリー59歳。始めて黒船を見た日本人は、その大きさに伊豆の大島が煙を吐きつつ向かって来たのかと錯覚した人もいたとか。柳庵もその一人か。 さて、坂本竜馬19歳も付近にいた。異国船警備の一員として、土佐藩の品川藩邸の警護に雇われていた。象山・松陰・竜馬は、明治を見ることなく横死し、柳庵は明治の新時代を見た。)

⑤在原業平

百人一首	ちはやふる神代も聞かず竜田川からくれなゐに水くくるとは
狂歌	ちはやふる神の略か阿めりかだからくれないといいかえるとは
米里幹 百人一首	ちはや経る神代もきかず去年ことしあめりか来ては国を噪がす (神代にも聞かなかったことであるが、あめりかが来て国は大騒 ぎ。去年は嘉永6丑年6月、ことしは翌7寅年1月を指す。「米 里幹百人一首」には「嘉永6丑年」と記すが、7年以降の作か。)

⑥小野小町

百人一首	花の色は移りにけりないたづらにわが身世にふるながめせしまに
狂歌	顔の色は変りにけりないたづらと阿めりかひとをながめせしまに (ついに、ペリー一行は上陸、江戸っ子は初めてあめりか人を ながめる。)
米里幹 百人一首	船のいろは黒く縦には赤きすじはしら三本帆かず九つ (正に黒船、縦に赤き漆喰のすじ、柱3本、帆数9つ。遠鏡で じっくり観察して、柳庵は黒船を画くが、その図は何処に。)

⑦三条右大臣

百人一首	名にし負はば逢坂山のきねかずら人に知られでくるよしもがな
狂歌	名にし負う大坂陣のままなればさびたるつるぎとぐよしもかな (あの、慶長年間の大坂の陣以来、240年振りの大いくさかと、 大慌てで武具を揃える。)
米里幹 百人一首	名にしおう合衆国の蒸気せん人のしらざるくるましかけぞ (あの、合衆国の蒸気船には我々の知らぬ翼車があるぞ。)

最後に、『狂歌 百人一首』からも引用してみましよう。

日本をちやにしてきたる上きせん水があらくてあまくのめない
ペリー艦隊の蒸気船は日本を茶化しに來ただけだと、ほっとしているの
でしようか。

毛唐人などちやにして上起せんたつた四はいでよるもねられぬ
「泰平のねむりをさます／じょうきせんたつた四はいで夜も寝られず」
と下の句はほぼ同じです。

久里浜付近の山からペリー艦隊を眺めた吉田松陰の作にも、
「アメリカがのませにきたる／上喜撰たつた四はいで夜も寝られず」と
あるそうです。

川柳には「じょうきせん四杯ばかりで眠れない」というのもありました。
すべて「泰平の眠りさます……」からのものじりでしようか。

同時代の狂歌や川柳を繙くと、ペリー艦隊及びアメリカ人を目の当たり
にした江戸っ子の茶化しや混乱、恐れ、大騒ぎの顛末が伝わって来ます。

以上ですが、少しは回答になりましたでしょうか。

『雨窓雑書』収録の「米里幹百人一首」の数首を引用して、当時の世相
を考えてみました。筆者がテーマとする「日本史に繋がる茅ヶ崎の歴史」
の一例をお示しできたかと考えています。茅ヶ崎の歴史の面白さがさらに
実感できたことと思います。

考えるチャンスをいただきましたご質問に感謝します。

(平成29年2月23日記)

※茅ヶ崎市文化生涯学習部文化生涯学習課主任(再任用)